

水球のまち柏崎

～まぼろしに終わった国体から受け継がれる歴史 新潟県柏崎市～

新潟県柏崎市の水球の歴史は、1964年の新潟国体水球競技の地元開催に際して、柏崎高校に水球チームが作られたことに始まる。その後、同校水球チームの活躍によって、水球が「まちのスポーツ」として浸透し、小・中のジュニア世代、さらには大学、社会人へと広がり、現在、柏崎は「水球のまち」を標榜している。

とりわけ、生徒数の減少と指導者確保の問題により地域の中学校の水泳部が廃部となったことを契機として、小・中・高校生を地域で一貫して育成するシステムとしてつくられた「柏崎アクアクラブ」の活動は特筆すべきである。

1. 柏崎市の概要

柏崎市は、新潟県の海岸沿いのほぼ真中に位置し、三階節で名高い米山をはじめ、黒姫山、八石山、西山連邦の山々に代表される自然豊かな人口約9万人のまちである。また、市の一部が佐渡弥彦米山国定公園に指定されており、観光資源豊富である。

アクセスは、JR 柏崎駅（最寄りの新幹線駅は長岡駅）、北陸自動車道柏崎 IC がある。

2. 競技種目の説明

水球とは、水深2m以上のプールに縦（ゴールライン間）30m 幅（サイドライン間）20m をフィールドロプによって区画し作られている。1チーム7人ずつの2チームで行い、高さ0.9m×幅3mの相手ゴールにボールを投げ入れて、より多く得点したチームが勝ちとなるシンプルな競技である。体のほとんどが水中にあるために反則は分かりにくく、掴む、蹴るといった行為が日常的に発生する事から「水中の格闘技」と言われる。日本では、1932年ロサンゼルス大会でオリンピック初出場を果たすが、1984年2度目のロサンゼルス大会を最後にオリンピック出場から遠ざかっている。



3. 柏崎市の水球の歴史

「創世期」

柏崎市は、1964年開催予定の新潟国体の水球会場に選ばれた。しかし水球会場として内定した1960年当時、柏崎には水球チームが無く、早急にチームを作ることとなった。「地元チームがなくては市民意識が盛り上がらない」との考えで、市内の中学校の水泳選手を柏崎高校に集中入学させ、1962年、柏崎高校水泳部に水球チームが編成された。コーチに当時、東京教育大学（現筑波大学）水球部キャプテン（大学4年生）の内田力氏を招聘。内田氏は翌年から柏崎高校の体育教師として着任した。



内田氏の指導の下、練習環境を整え集中的なチーム強化が行われた結果、チームはメキメキ力を付け、全国制覇目前までできていた。

「まぼろしの新潟国体とその後」

大会を目前に控えた1964年6月16日、マグニチュード7.5の地震が新潟県を襲った（新潟地震）。「夏季国体」はやむなく中止された。

選手達の失意の中、柏崎市は市主催の全国選抜高校水球大会を同年8月2日、柏崎市営総合プールで開催。柏崎高校チームは全勝優勝を成し遂げた。さらに、同年の日本高等学校水泳競技大会水球の部（インターハイ）で念願の初優勝、翌1965年開催の大分国体でも優勝するなど、柏崎高等学校の黄金時代が築かれた。その後も柏崎高校は強豪校として活躍している。



4. 「柏崎アクアクラブ」の取り組み

1991年、柏崎水球の更なる普及と強化を見据えて、「柏崎 Jr. 水球クラブ」が活動を開始。市内中学の水泳部を中心に参加を呼びかけ練習会を開催、大会にも出場を果たした。

しかし、少子化によるジュニア世代の減少とそれに伴う中学校の部活削減等により水泳人口の減少に歯止めがかからない状況となった。そこで、ジュニア選手の確保と一貫指導を目指し、2000年に「競泳」選手育成を目的とした「柏崎アクアクラブ」を立ち上げた。また、2004年に「水球」が加わり、現在、「小学生（男女）」「中学生」「中学女子」「高校男子」「高校女子」の5つのカテゴリーで活動している。

柏崎アクアクラブの特徴は次のとおりである。

①地域で一貫した「強化システム」を構築

アクアクラブは、柏崎水泳連盟が中心となり、「水泳」「水球」の「普及→発掘→育成→強化」を地域で一貫して行う「単一型地域ジュニア競技スポーツクラブ」として発足。個人（小中高）、中学校部活、高校部活など様々な所属の選手が地域で自由に練習できる環境を整備し、育成・強化を図っている。

また、競泳と水球の育成を連携して実施。クラブの中で練習段階から練習会場や指導者のシェアが可能となり、有効かつ効率的に練習を実施している。

②クラブの指導者=水泳連盟+小中高教員+地域の指導者

学校の部活では、顧問の先生の異動で、活動ができなくなるという問題が生じる。アクアクラブでは、地域の指導者と部活動の顧問と一緒に指導に当たる。指導できる顧問がいなくなっても、アクアクラブで継続して練習ができる。

③小・中学生の可能性を広げ、選択肢を確保

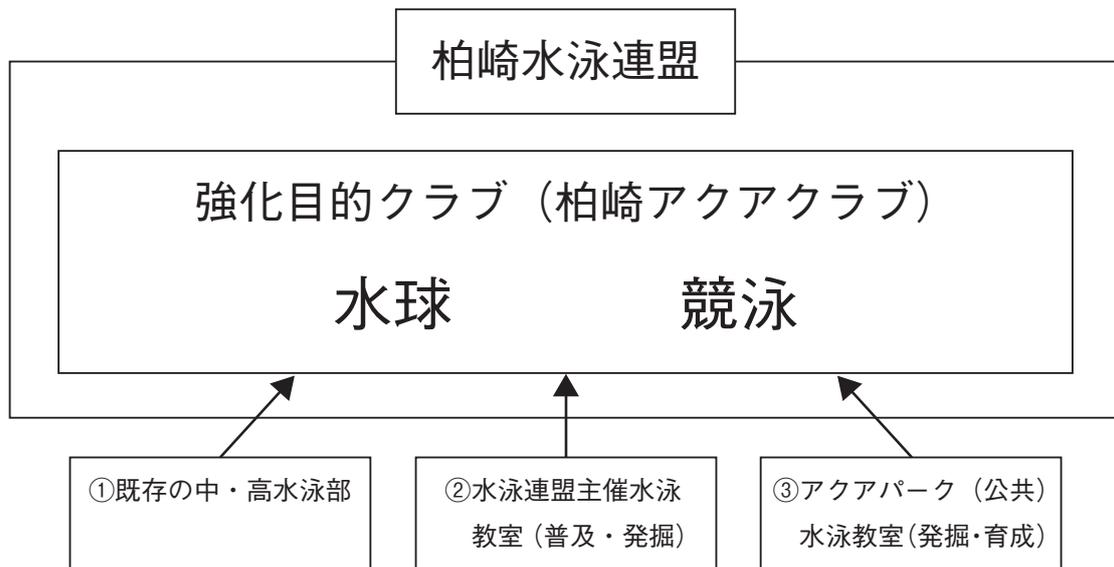
小・中学校で競泳をしている選手は、高校では男子は水球しか選択肢がなく、高校で競泳をする場合は市外の高校へ転出していたが、クラブの設立により競泳の部活動がない地元高校に進学しても、継続して練習できる環境が整った。

また、担当する指導者も選手を囲い込むのではなく、選手の「競泳・水球」の選択に際しては、「地域の宝」として選手を育てるという観点から指導・助言している。

2004年（平成16年）のクラブ員は小学生から高校生まで約20名だったが、徐々に増加し近年ではコンスタントに60から70名を維持している。



(強化システム)



近年、各カテゴリーの柏崎アクアクラブ出身の選手には、男女ともに日本代表を輩出しており、この強化システムの一つの結果と言えるだろう。

5. 悲願の国体へ向けて

2009年新潟国体水球競技が柏崎市で開催されるのを契機に、その選手強化を目的に小学校・中学校から選手を募集した。2006年の春季全国ジュニアオリンピックに小学生が初出場してからは常連チームとなっている。

2007年には夏季大会（岡山）で小学生が優勝。春季大会（千葉）で中学男子が準優勝、2009年夏季大会（京都）で中学生4位、春季大会（千葉）で中学女子準優勝、小学生4位、2010年夏季大会（広島）で中学男子3位と



コンスタントに入賞している。

そして、悲願の地元開催となった2009年の「トキメキ新潟国体」では、選手全員が地元の高校生（アクアクラブ所属）で、45年ぶりの国体に市民一体となって応援した。その結果、新潟県チームで4位という成績を残した。

6. 「うねりはその先へ」

1998年、地元の新潟産業大学で水球部が発足。2010年から日本代表選手の青柳勸氏が監督に就任。全国から選手を集め、2011年には女子チームもメンバーがそろい、現在30名を越える部員が、水球だけでなく地元交流や社会貢献も活発に活動している。

また、青柳勸氏を中心とした社会人チーム「ブルボンKZ」が、地元企業である（株）ブルボンをはじめとする多くの企業スポンサーやサポーター会員の支援を受けて結成され、現役日本代表や国内トップレベルの選手を集め日本一を目指し、さらに日本代表として「オリンピック」に出場するためにここ柏崎で日々練習をかさねている。

また、2010年からは新潟県体育協会の「地域の核となるスポーツ振興事業」の指定を受け、柏崎市内の小中学校をブルボンKZ、新潟産業大学の選手などが出向き、水球の指導を行い、8月には8校12チームによる第1

回柏崎市小学生水球交流会を開催している。

こうして今、柏崎では水球の普及から始まり、選手の発掘・強化の柏崎アクアクラブを底辺に、全国制覇を目指す高校・大学に水球日本一及び世界（オリンピック）を目指すブルボンKZの大きなピラミッドの形が形成された。全国でもまれに見る水球の全カテゴリーのチームを有する「水球のまち柏崎」となっている。



このレポートは、関係者へのヒアリング、資料提供等を受け、（公財）えひめ地域政策研究センターにおいて取りまとめました。
